

か向上せず、光量で決まる仕事は口径の2乗で差をつけられる。中小口径と5m鏡の光量差は桁の差であるが分解能はファクターの差である。口径が桁違いに大きい望遠鏡が出来るなら話は別だがまだまだ中小口径でも一流の仕事が出来る余地はある。例えば新しい連星系の発

見(軌道面が視線と直角でも可能)恒星の直径、銀河系の微細構造など興味ある問題に取り組めるのである。次の機会には紹介記事でなく、手持ちの結果について書きたいと念じている。

「天文学将来計画についての検討会」報告

天文学研究連絡委員会・将来計画小委員会主催になる公開の将来計画検討会が、天文学会春季年会の期間を利用して開かれた。5月9日と11日の2回、それぞれ午後6時から約3時間にわたって、東京大学天文学教室にて行われ、各地から集った総計90人ちかくの参加者が、活発な意見交換を行った。第1回は、小委によって行われたカードによる問題意識の発掘とその整理結果の報告を中心に討議が進められ、“どうしてKJ法カード方式がとられたか? ”、“カードの結果をこれからどう生かすか?”などが主に議論された。これらの間に対して出された答の要点を以下に記す。●いろいろ今までは違った大きな情勢の変化があるので、広い範囲から自由な意見を大規模に募る必要があった。●成文化した将来計画を作る予定であるが、それには、今まで以上にビジョンというべきものを盛りこみたい。●具体的計画の原案は小委員会および小委員会の依頼で加わってもらう人々で作成するが、その人々が考える上で、基本的背景として皆の問題意識を認識する必要がある。●カードには多くの情報が含まれているので、できるだけ多くの人に見てもらいたいが、意見を書いて下さった人の立場を尊重して、小委員会の責任において貸し出す。●小委員会には特別な権限は何もないが、リーダーシップをとって委員以外の方々からも秀れた考えを集め、皆の合意を促進することによって、その中から信頼性のある将来計画が生まれるよう努力する。●限られた数の小委の能力には限界があるので、各分野での意見調整、小委への意見の伝達には、各自の積極的努力を期待する。

また第2回は、個別の問題を中心に討議された。主な論点は次のとおり(順不同)。●位置天文学も改革の時期に来ている。●組織と人材への配慮から、大型装置は共同利用が望ましい。●太陽物理も基本的分野であり、将来計画を立てつつある。●大気圏外観測によって、即応性のある地上精密観測装置の需要が急増している。●宇宙研の拡充改組が実現するなら、天文学の性質上、高エネルギー分野の他に、飛翔体による観測の不可欠な分野として、赤外天文、太陽・太陽系物理、恒星・銀河物理、理論天文学などが包括されねばならない。●光学

技術によって像を作るような望遠鏡を用いて宇宙空間から観測する将来計画は、必要なら早急に立てなくてはならない。●国外の条件の良い所に大型望遠鏡を置く計画を、長期的視野に立って練る。●現存の中・小型装置を利用して、国外における天文観測の試験研究を始める。●電波でも大気圏外観測は必要となる。●地上からの赤外観測の強化を行うなら、急ぐことが肝要である。●早く大型宇宙電波望遠鏡が活動しだして、天文学振興に大きな力となることを期待する。●地方の大学、特に女子大にも天文学の講座を置いて欲しい。●天文学は実験物理学とは異って、急に様式を変え難い学問ではあるが、新しい必要性に対処できるように、いくつかのタイム・スケールをもった将来の青写真を作る。

なお席上、小委の一人である小田氏より、我国の大気圏外観測の将来計画についての説明があり、その実行機関としての国立共同利用研究所設立の可能性が強まってきたことにも言及された。

以上が速記録をもとにしてまとめた要点であるが、出席された方で是非補足が必要と思われる方は、ご連絡いただきたい。また、将来計画小委では、今までの広範な意見を基にして検討すべき問題を整理し、今後の検討に参加を依頼する人々を選び、6月18日の本委員会にその素案を計る予定である。夏の間は国際天文学連合総会もあるので、本委員会の了承のもとに実質的検討にかかるのは今秋以降と予想される。したがって、公開討論会に参加された方々はもちろんのこと、この報告を見られてからでも遅くはないと思われますので、ご意見があれば、小委員会宛にお寄せ下さい。ご意見はできるだけ具体的に富んだビジョン(将来の見通しに基いて、何時、何処で、誰が、何を、どうするか、の実行可能な計画時系列)を歓迎します。原案に関する公開討論などは追って行う予定です。

昭和54年5月21日

天文学研究連絡委員会
将来計画小委員会

(文責 小平)